

## 「新型コロナウイルスワクチン(COVID-19 ワクチンモデルナ筋注)職域接種後副反応疑い調査中間報告(1回目接種)」

- Ⅰ 日本医療科学大学において新型コロナワクチン(COVID-19 ワクチンモデルナ筋注)職域接種後の副反応疑い調査(1回目接種)を実施しました。
- Ⅰ 接種部位の局所反応は、痛み(約91%)、腫れ(約61%)が多くみられ、その他の症状は、筋肉痛(約76%)、倦怠感(約54%)、頭痛(約37%)、発熱(約34%)、関節痛(約20%)の順で多くみられました。
- Ⅰ 発生頻度は多くの場合2日目がピークとなり、4、5日目には大幅に低下していました。接種部位の腫れ・赤み・かゆみは7、8日目に再び微増する傾向がみられました。
- Ⅰ 女性は全体的に発症率が高い傾向がみられました。
- Ⅰ 多くの症状の発症率において、10代・20代で高い傾向がみられ、発熱は20代で最も高く、37.5℃以上38℃未満が約33%、38℃以上が約12%にみられました。
- Ⅰ 接種部位の腫れ・赤み・かゆみの発症率は、40代でやや高い傾向がみられました。

### 背景

現在、新型コロナウイルスワクチンの接種が進み、モデルナ社製ワクチンの職域接種も広く行われるようになってきています。しかしながら、モデルナ社製ワクチンにおける副反応疑いの大規模な調査は厚生労働省による自衛官を主対象とした調査などに限られ、職域接種における調査報告もごく少数です。そのため、一般の方への正確な情報提供は未だ不十分な状況にあります。

日本医療科学大学では学生・教職員・学外関係者1800名に対し、新型コロナワクチン(COVID-19 ワクチンモデルナ筋注)の職域接種を実施しました。ワクチン接種後の副反応疑いのアンケート調査を行い、1004件の回答を得ました(無回答等を含む)。本調査の回答は、男女がおおよそ半々で、10代・20代が多く含まれていました(回答の約7割)。本調査の結果は、特に若年層の副反応疑いの状況を正確に理解する上で有用だと思われます。

## 結果

ワクチンの接種日～8日目において、接種部位の局所反応が発生した人は、痛みが約91%、腫れが約61%と多くみられました。その他の症状が発生した人は、筋肉痛が約76%、倦怠感が約54%と多くみられ、次いで頭痛が約37%、発熱が約34%、関節痛が約20%でした。多くの症状の発生は2日目がピークとなり、4、5日目には大幅に低下していました。痛み以外の局所反応(腫れ・赤み・かゆみ)では7、8日目に再び微増する傾向がみられました(遅延性皮膚反応:モデルナアーム、COVIDアームと呼ばれる症状)。性別で比較すると女性は全体的に発症率が高い傾向がみられました。年代別では、多くの症状(接種部位の腫れ、筋肉痛、頭痛、発熱)において10代・20代で発症率の高い傾向がみられ、発熱は20代で最も高く、37.5℃以上38℃未満が約33%、38℃以上が約12%にみられました。痛み以外の局所反応(腫れ・赤み・かゆみ)において40代で発症率がやや高い傾向がみられました。

中間報告の資料は以下に掲載しています。

URL:

[https://www.nims.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/09/1st\\_result.pdf](https://www.nims.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/09/1st_result.pdf)

## 【補足事項】

※2回目接種の結果についても現在、解析中です。

※本資料は中間報告であり、論文の査読を通過した内容ではありません。詳細な解析を追加で行い、続報や論文等で今後発表を行う予定です。本調査にご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。

## 【お問い合わせ】

日本医療科学大学 IR 推進室長

徳永 千尋

TEL: 049-294-9000(代表)

E-mail: [tokunaga@nims.ac.jp](mailto:tokunaga@nims.ac.jp)